

## 雜 錄

### 問題の人ソクラテス

キリアム・デイヴィド・ロス

ソクラテスは希臘哲學史上最も解き難い謎の人物であらう。彼の意義に關して、諸家の意見は甚だしく岐れてゐる。一方、彼をイデア説の創唱者とし、プラトンはその單なる解説者とするものがある。その反對に、ソクラテスを殆んど傳説的な人物と考へ、彼の名によつて連想する道德説の全體をも、初期のソフィスト達に歸しようとするものがある。兩者の中間に立つて、ソクラテスは本質的には實踐的な道德の教師であり、殆んど或は全く自家の學説を有しなかつた、と考へるのが普通行はれてゐる見解のやうである。

ソクラテス問題に就いての典據はアリストファネス、プラトンのクセノフオン、アリストテレスである。今までは、主としてクセノフオンとプラトンの初期の對話篇とによる解釋が行はれてゐた。アリストファネスは兎角不評で、彼がソクラテスに就いて語るところは、喜劇詩人の氣まぐれな創造である、プラトンに就いても、對話篇の大多数に於ては、ソクラテスはプラトンの代辯役をやらされてゐる、と考へられて來た。アリストファネスとプラトンとがソクラテスその人の言行に關する典據として眞面目に取

上げられるに至つたのは最近のことである。そしてそれはパーネットとテイラーとの研究によるものである。

勿論アリストファネスの描くところには誇張がある。だが「雲」に於けるソクラテスは實在のその人と、普通考へられてゐるやうに、全然類似がないわけではない。若しソクラテスが、クセノフオンの傳へるやうに、自然學や宇宙論に全く無關心な、當り障りのない道德家であつたら、喜劇詩人でも、ソフィストの親玉、大膽な自然學者、等々としては描かなかつたであらう。「雲」の出た頃(四二三年)には、ソクラテスは四十六歳であつたが、タレスの昔から當時まで「哲學者の仕事」であつた自然學的、宇宙論的思辨を人並にやつてゐたらしい。

ソクラテスをアナクサゴラスの門下アルケラオスの弟子と考へることは許されないが、一時アナクサゴラスの影響の下にあつたことは考へられる。「雲」を讀めば、ソクラテスがアナクサゴラス風の自然研究に興味をもち、又弟子達をもこの方面の研究に引入れたことがうかがはれる。併し、ソクラテスは宇宙論や自然學の分野では獨創的な考へは出さなかつたらしい。このことは、アリストテレスが、自然哲學の先驅者を擧げてゐる際に、ソクラテスの名が洩れてゐることによつてもわかる。「フアイドン」は、ソクラテスのアナクサゴラスに對する關心を示してゐるが、すぐにアナクサゴラスの自然觀が機械論的で、目的論的でないことに幻滅を感じ、それ以來自然研究は自分に向かないものと斷念したと語つてゐる。自然學に對する關心の否定は「辯明」に於ても「メモラ

「ソクラテス」に於ても見え、又それは眞實と考へなければならぬ。「辯明」に於て語られてゐるやうに、「何人もソクラテスより賢明でない」といふカイレフォンに與へられたデルフォイの神託は、ソクラテスをして、總ての他の研究を放棄し、同時代の誰も、生の行爲に關して、自分より賢明でないかを發見することに専念させた。勿論、この神託の一件にはヒュマーと誇張とがあらう。併し、それは、この頃ソクラテスの心中に起りつゝ、あつた科學から道德への興味の轉換を決定的ならしめたと考へて差支なからう。

アリストファネスのソクラテスに對する態度は依然不可解である。「饗宴」では、二人は見たところ仲よしのやうである。若し「雲」に於てのやうに、アリストファネスが實際ソクラテスの烈しい敵であつたなら、プラトンはこのやうに描くことは出来なかつたであらう。古い傳説は語つてゐる。プラトンはアリストファネスの喜劇を非常に喜び、その臨終には彼の喜劇が見出された、そして「グラティアの女神達は、決して滅びることのない神聖な祠を求めてこの不滅の詩人のたましひの中に見出した」といふやうな意味のエピグラムをさへ作つたといはれる。さて、プラトンの生と愛とに於て占めるソクラテスの中心的な地位から考へて、若しアリストファネスを實際にソクラテスの敵と考へたなら、如何に優れた詩人を愛するとも、このやうにまで個人的感情を抑へることは出来なかつたであらう。併し、プラトンは「辯明」に於てアリストファネスに育まれた偏見を、世論のソクラテスに對する反對と彼の死の原因としてゐる。この二つのことほど考へるべきであらうか。ア

リストファネスはソフィスト連の顛倒せる道德説を烈しく攻撃した。又、それ程でもないが、當時の新しい自然觀にも反對した。ところが、ソクラテスは奇妙な風態と行動によつて喜劇には持つて來いの人物である。新しい科學にも興味をもつてゐるし、意圖に於ては異なるが、方法に於ては外見上ソフィスト連に似てゐる。それ故、喜劇詩人が彼をそれらの傾向の代表者として選んだことは當然過ぎるであらう。ソクラテス自身もアルタルコス傳へるところに従へば、此の如きアリストファネスの態度の眞意を見誤らなかつた。併し、愚衆は、新しい運動に對する眞面目な攻撃とソクラテスに對するひやかし半分の攻撃とを區別することが出来なかつた。アリストファネスが何氣なしにやつたことが根絶し難い偏見の種を蒔いてしまつたのである。

次にクセノフォンに移らう。彼が描いてゐるソクラテスの姿は甚だ疑はしいものとされてゐる。「キュロバイティア」「オイコノモコス」「饗宴」に於て描くところのものは彼の想像の産物であり、そこにあらはれる歴史的人物は自分の意見をではなくして、作者のそれを語つてゐる。彼は四〇一年にアテナイを去り、その時はまだ若年、それ以前は軍務に服し、ソクラテスとの關係は僅か數年に限られてゐる。又彼の著作には哲學への關心も能力もあらはれてゐない、等々のことが擧げられてゐる。だから「メモラビリア」は、ソクラテスの言行の充全な記録とは、否その免れない制限を斟酌しても信頼すべきものとは受取れないといはれる。さういふ主張の大部分は眞理だが、あまり大げさにいつてはならない。「メ

モラビリア」は小説的な「キユロバイテア」や、劇的な「オイコノミコス」乃至は「饗宴」などとばわげが違つてゐる。それはソクラテスを辯護しようとする眞面目な試みである。自分が居合せたものとさうでないものとは注意深く區別し、後の場合にはソクラテスの話し相手の名を擧げてゐる。「メモラビリア」は捉はれない讀者には、勿論靈感ば興へないが、眞面目な感じをさせる。そこに描かれたソクラテスの像は、充全なものではないが、恐らく眞實であらう。尤も、クセノフォンが聞かなかつた、或は聞いても興味のなかつた、或はソクラテスの辯護に直接關係のなかつた哲學説もあつたらう。併し、若し例へばイデア説が、プラトンの對話篇に描かれてゐるやうに、ソクラテスの思想に於て中心的な地位を占めるものであつたら、何等かのエコーが「メモラビリア」にも残つてゐてよささうなものである。靈魂不滅の信仰、輪廻とアナムネシスの思想に就いても同様である。

さて、それらの教説がソクラテスに歸せられるのは主としてプラトンの對話篇を基礎にすることである。劇的對話篇に於ては作者は自在畫を描くことを許されてゐる。讀者は、そこに現れる人物が彼の口によつて語る總てのことを實際に考へてゐたと思つてはならない。學者達はプラトンの對話篇を読んで、イデア説はプラトンのものであつて、ソクラテスのものではなまいといふことを信じながら、いつもソクラテスによつて語られるのを聞いて、やはり何處かに本當らしさがあると感じた。イデア説がプラトン自身のものであつても、ソクラテスの教の直接的な結果である。

だから、プラトンが、師の教から發展させた教説をソクラテス自身に歸しても劇的過誤を犯すものではないと思つた。以上は從來のプラトン學者の見解であり、又強い説得力をもつてゐる。

殆んど一般的に承認されてゐるプラトンの著作の年代に従ふとき、「テアイテトス」(三六八—七年)までは、ソクラテスは對話の中心人物であり、數年後に出た「フィレボス」に於て、再びその地位を占めてゐる。彼がソクラテスをして語らしめた思想がソクラテス自身のものであるなら、プラトンは「テアイテトス」の著作の時代、即ち六十歳まで、傳記者であるに甘んじ、自分の著作に於てさへ、自説を陳べ得なかつたと考へねばならない。併し、プラトンが、それが假令ソクラテスのものであつても、他人の所説を記録するに甘んじた、とは考へられるであらうか。否、彼はソクラテスの思想を劇的に描くことからはじめ、やがて自家の説を自由に述べるために、劇的對話の形式をとつたと考へるべきではなからうか。かゝる假説から期待されるものは、教説とは無關係に文體と語彙とに基いて樹立された對話篇の年代順による研究と、相覆ふものである。初期の對話篇の大部分に於ては、イデア説は見られない。「メモラビリア」に於てのやうに、ソクラテスはたゞ定義を求めのみである。「プロタゴラス」、「大ヒッピアス」、「エウテュロン」に至つて、イデア説は漸く現れるが、大した役割は演じてゐない。「クラテュロス」、「メノン」、「エウテュデモス」を経て、「ファイドン」、「國家」になると、斷然主役を勤める。こゝまでの發展に關する限り、對話篇の著作年代が後であればある程、

それに於て占めるイデア説の地位は主要なものとなつてゐる。又プラトンは、イデア説の占める地位と對話篇に取扱はれた年代とをコレラティツとしてほゐない。若しプラトンがソクラテスの精神的發展を描いてゐるのであつたなら、劇的年代が後のものであればある程、イデア説は益々重要な地位を占めなければならぬ筈である。例へば、「メノン」の劇的年代は四〇三—二二年前、「國家」の年代はそれより十八年前、即ち四二一年頃である。しかるに、イデア説に關する限り、後者は前者よりも多くのものを含んでゐる。初期の對話篇の中にも、劇的年代に關する限り、「國家」と同じものがあるが、それらに於いては、イデア説は全然缺けてゐるか、軽く觸れるに止められてゐる。しかるに「國家」に於ては、完全な成熟を示してゐる。勿論、個々の對話篇には、その性質上、イデア説の導入に適、不適があるだらう。併し、このことを斟酌しても、プラトンはソクラテスの發展の記述をしてゐるのではなくして、彼自らの發展を表現してゐるのだと考へざるを得ない。

パーネット曰テイラー説にとつての重大な困難は「パルメニデス」であらう。ソクラテスが實際にパルメニデスに遇つたかどうかは極めて疑はしい。兎に角遇つたこととして置かう。それを信じるなら、ソクラテスはそのとき二十歳を越えてゐた筈はない。それなのに、彼は自由自在にイデア説を述べて立てる。「フアイドン」以前の諸對話篇に於て、それらはソクラテスの三十五歳から最後までを取扱つてゐるに拘らず、仄かにしか現れてゐないイデア説を、「パルメニデス」に於て二十歳の青年ソクラテスが完全に出來上つた教説として述べてゐる。これらのことを、プラトンが、實際のこととして承認を要請してゐるとは到底考へられない。尙又驚くべきことには、個物とイデアとの關係を考へる仕方、「分有」と「模倣」とは劇中人物パルメニデスによつて散々にやつつけられてゐる。若しソクラテスがそれらの反論を實際にパルメニデスから受けたのなら、それらに對抗するなり、或は自説を捨てるなりしなければならなかつた筈である。それなのに、後年のソクラテスが描かれてゐる諸對話篇に於て、彼は相不變平氣で「分有」や「模倣」を語つてゐる。「パルメニデス」はソクラテスの精神史をではなくして、プラトンのそれを示すものである。そして彼が今まで述べて來たイデア説に存する諸困難を意識するに到つたことをあらはすものである。そしてこれは避くべからざる結論である。

作者が劇中人物の一人となつてはならないやうに、對話篇に於ても、作者が對話の中に出てはならない。又、普通の場合架空の人物を入れることも許されない。これは、プラトンが従はなければならぬと思つた慣習である。現に、比較的後期に屬する「ソフィスト」までの諸對話篇に於ては、たゞ實在の人物のみが語つてゐる。さて、かういふ慣習に従ふ哲學者が、自分の生長しつゝある哲學説を述べようとする際、どうするのが自然であるか。彼の述べる語見解が尊敬する師から學んだ思想の自然的發展である限り、師をして語らしめるであらう。だが、師の説にそれ程關係の深くない説を述べるとなると、架空の人物を作り上げる。例へば「ソフィスト」や「政治家」に於けるエレアの異邦人、又は「律法」

に於けるアテナイの異邦人。又はその説に近い歴史的人物の口を借りて自分の意見を述べらる。現にプラトンは「ティマイオス」に於てかういふ方法を試みてゐる。

「ソクラテスの對話」の性質に就いては、プラトンの對話篇から學び得るものを除いては、殆んど知られてゐない。ところが、アリストテレスは「詩學」に於て、ソフロンやクセナルコスのみモスに關連して、このことに言及し、それを「散文詩」として、即ち散文によつて書かれてゐるが、本質的には詩として規定してゐる。このことは、詩はその本性上、歴史よりも普遍的哲學的だ、詩人の仕事は虚偽を然るべく語ることだ、と考へるアリストテレスの説から見て重要である。即ち、アリストテレスが「ソクラテスの對話」から期待したのは「一般的眞實らしさ」であつて「傳紀的正確」ではなかつたのである。ところで、「メモラビリア」の歴史性は若しアリストテレスが「ソクラテスの對話」と考へたものに屬するならば、疑はしくなる。併し、對話の形式をとることは、一般に、ソクラテスの言説の特性的なもの一つであつた。それ故「メモラビリア」もプラトンの「辯明」もアリストテレスのいふ意味に於ける「ソクラテスの對話」の中に入らぬ、従つて非歴史的と考へるには及ばない。尙、「ソクラテスの對話」を知るものとして、アイスキネスの断片がある。それによつて描かれたソクラテスの姿は、プラトンの後期の對話篇よりも、彼の初期のものやクセノフォンによつて與へられるものに近い。哲學説はあまりあらはれず、「ゴルギアス」に於けるやうな當代政治家の厳しい批評や「國

家」に於けるやうな政治的、教育的改革の入念な計畫も聞くことが出来ない。アイスキネスの断片は、自分の結論を益々確めるのみである。

だが、最も確實な證據はアリストテレスから得られる。「形而上學」に於て、イテア説は二つの起源を有するといはれてゐる。第一には、プラトンの最初の哲學の師といはれるヘラクレイトス派のクラテュロスからである。彼は、感覺的なるものは絶えざる流轉の中にある、従つて眞知の對象ではあり得ないといふことをプラトんに教へた。そしてプラトンは、眞知があるからには、その對象として、感覺的でない他の存在がなければならぬと結論した。さて、この頃ソクラテスは彼の注意を普遍の問題に集中してゐた。尤もそれは一つの領域、即ち倫理學に限られてゐたがそこに於て彼は徳の普遍的な定義を探求してゐたのである。アリストテレスに従へば、二つのことが、即ち歸納法と普遍的定義とが、正當にソクラテスに歸することが出来る。では、ソクラテスはイテア説に如何なる貢獻をなしたか。プラトンはクラテュロスから感覺的なるものの流轉を學んだ。と同時に、ソクラテスによつて、正しき生活のためには、徳とは何か、諸徳とは何かといふことに就いての知識が不可欠であることを教へられた。この兩者がプラトンの精神に於て融合し、徳とその諸種とは、非感覺的存在であつて、永遠、不變であるといふ確信を生むに至つたのである。アリストテレスによれば、これらの諸存在はソクラテスに於ては獨立せる存在とは考へられなかつたが、プラトんに至つて、「離存」

するものとして獨立せる存在を賦與され、そしてイデアと呼ばれたのである。プラトン哲學は、全體から見ても、ピュタゴラス哲學に似てゐるが、細部に就いても、例へば個物の「イデア分有」の如きは、ピュタゴラス派の説く、個物の「數模倣」の説に酷似してゐる。だが、アリストテレスは、プラトン哲學がピュタゴラス哲學から派生したといふのではない。全く別の方面から、即ちクラテュロスとソクラテスが拓いた道を経て、プラトンはピュタゴラス的なものへ到達したのである。前二者から、そして彼等のみから、プラトンの初期の思想の形成力は由來するといふのである。尤も後期の思想の發展、特に「イデア數」の思想は直接にピュタゴラス哲學の影響を受けてゐる。

アリストテレスに於ては、ソクラテスは形而上學者としては現れてゐない。たかだか倫理學者乃至は論理學者である。彼はイデア説の創唱者ではなくして、普遍的定義の探究によつて、それへの刺戟を與へたのである。即ち彼の教説と實踐とは、プラトンをイデア説といふ一つの形而上學體系の樹立に導いたのである。アリストテレスの傳へるところは、ケソノフォンやプラトンの初期の對話篇の描くソクラテスの像と完全に一致する。他方、イデア説をその全體に亘つてソクラテスに歸する見方とは断然相容れない。だが、ひとはアリストテレスが傳へるところのものの價値を輕視し、或は自説に都合のよいやうに解釋する。先づ、アリストテレスが生れたのは、ソクラテスの死後十五年を経てであり、彼のソクラテスに就いての知識は全くプラトンの著作や、その他の

ソクラテスの所傳に依存するものであるといはれる。尤もスタゲイラ生れの哲學者は、プラトンの門に入るまでは、ソクラテスの學問に就いては、殆んど或は全く知らなかつたかも知れない。だが、彼の知識が全然プラトンの對話篇によるものだとはいへない。アリストテレスは、二十年に亘るアカデメイア生活に於て、プラトンから、或は他の學徒から、イデア説の起源に就いて、多くのものを學ばなかつたであらうか。彼はプラトンの後期の思想に關して、諸對話篇に現れてゐる以上のものを傳へてゐるが、ソクラテスに就いてもさうではなからうか。現にクラテュロスがプラトンの最初の師であつたといふことは「クラテュロス」篇に於ても、又他の對話篇に於ても語られてゐない。次に、アリストテレスは、諸普遍者を「離存」するものと考へ、それらをイデアと呼んだのはプラトンであつてソクラテスではないといつてゐる。ところが、プラトンの對話篇に於ては、ソクラテスその人がやつてゐる。このことは、アリストテレスが、プラトンのさういふ章句を、語られたまゝには受容しなかつた證據である。アカデメイアに於ては、現代の學者がやるやうな見當違ひは思ひもよらないことであつた。プラトンの諸對話篇は、彼自身の哲學説を述べるために選んだ方法であつて彼の師の傳記ではないといふことは、周知の事實であつた。

かゝる結論を避けるために、アリストテレスの章句を解釋し直して、イデアを「離存」するものと考へることによつてソクラテスと對照せしめられたのは、プラトンではなくして、半ピュタゴラス

學徒、メガラの半エレア學徒、「ソフィスト」に出て来る「形相の友達」であるとする。しかるとき、ソクラテスのものと考へられるのは、中期の對話篇にあらはれた規範的イデア説となるであらう。さて、問題になつてゐる「形而上學」の章句は二つある。一方では「離存」は語られず、他方ではプラトンに名指されてゐない。併し、この二つの章句の比較によつて、ソクラテスと對照せしめられ、イデアの「離存」を説いたと考へられるのは、プラトン以外の何人でもないことは明白である。そして「離存」は「ファイドン」「國家」以來、我々には親しいものとなつてゐる。これ以上の證明の必要はないが、「倫理學」に於ても、イデア説は自分の友達の創唱したものだから、攻撃するには氣がひけるといつてゐる。アリストテレスが、自分の生れるより十五年も前に死んだソクラテスに就いてこんなことをいふ筈はない。

アリストテレスの證據はイデア説をソクラテスに歸する者には致命的である。そして上述のことから自分にとつては決定的と思はれる。だが、或る意味に於ては、ソクラテスからプラトンへは一步である。徳とは何か、美とは何かと問ふことはかゝるもののあること、そしてそれらが個々の道徳的行動や美的對象とは別のものであることを含蓄してゐる。

アリストテレスのいふやうに、ソクラテスはプラトンをイデア説へ導く動力を興へたのである。併し、ソクラテスはそれ以上のことばはなかつた、自分でイデア説に到達したのではない。形而上學は彼の關心事ではない、行爲が彼の問題であつたのである。

だが、彼は單なる實踐道德家ではなかつた。盲目的に時代の慣習に従はせるのではなくして、何故にかくすべきであるかを考へさせやうとした。行爲に關して推論することゝ教へた。併し推論には確實な出發點がなければならぬ。特定の情況にあつて如何に行動すべきかを知るためには、普遍的な原理を要する。しかもそれは承認されただけではなくして、眞理として認識されたものでなければならぬ。かやうな普遍的原理として、彼は定義を、徳と諸種の徳との定義を考へた。クセノフォンやプラトンの初期の對話篇に於て繰返し繰返しいつてゐるやうに、原理を把握せずに、有徳な行爲の事例を枚舉するだけでは駄目である。原理を立て、も、それに従ふと萬人が悪と認める行爲に到るものや、萬人が義とする行爲を蔽ひ得ないやうなものに立たない。明澄な思惟を道徳問題に向けることを力説した點にソクラテスの獨創性は存する。それによつてソクラテスはアテナイの社會に比類のない感化を興へたのであるが、他方傳統とか慣習とかいへば有難く頂く舊弊家にも、彼が得意の辯證法でやつつけた尖端人にも甚だしい不評を買つたのである。

かやうな努力を続ける中に、ソクラテスは、或る推論のテクニクを發展させたことば殆んど疑ひない。その一つはアリストテレスの所謂歸納法である。これには二つの仕方がある。第一には單純な「一致の方法」で或る徳の定義に到達しようとする。問題になつてゐる徳の明白な場合を種々舉げ、それらに一々當つて見て、共通的な普遍的原理を引出さうとするのである。第二には、「破壊

の方法」である。定義が下されてから、その定義には適ふが、明かに不正であるやうな行爲を一々挙げるといふやりかたである。ソクラテスはこの第二の方法を第一の方法よりも好んで使つたといつてよい位である。

又「フアイドン」には「ヒュポテシスの方法」に就いて述べてゐるところがある。テイラーは近著に於てこの方法を立派に解明してゐるがそれがソクラテスのテクニクの一つであつて、プラトンのものでないことは、クセノフォンがそれに觸れてゐるのによつても分る。クセノフォンがそれをプラトンからとつたにしても、何故多くのものを、イデア説全體をも残しながら、これだけ採つたか、そこに理由がなければならぬ。クセノフォンは「フアイドン」のこの部分に於て、彼自らがソクラテスの下にあつた間に、多分よくは分らなかつたらうが、覚え込んだものを再認したからであらう。

それで、ソクラテスは、道徳的眞理の追求に際して、可成り入念のテクニクを使つたことがわかる。そして、彼自身のテクニクを反省した限り、彼は論理學者であつた。この點からいふと、ソクラテスは倫理學の建設者であつたのみならず、又論理學の建設者の一人に算へられるべきであらう。

イデア説の外に、プラトンがソクラテスに語らしめた多くの教説がある。それらに就いても、果してソクラテスその人の意見であるか否かを知り度い。先づ靈魂の不滅、輪廻、アナムネシスと一連の思想である。今度はアリストテレスは助けてくれない。だが、イデア説に際してと同じ考察がこの場合にも或る程度まで

妥當する。クセノフォンがそれらに就いて全く沈黙を守つてゐることは、それらの問題がソクラテスの十八番ではなかつたことを感じさせる。ディオゲネス・ラエルティオスも、イアムプリコスも他の説記家達もプラトンとピュタゴラス學徒との關係に就いては語つてゐるが、彼等とソクラテスとの關係に就いては一言も觸れてゐない。このことは、初期アカデメイアに於て、プラトンとピュタゴラス學徒とを結びつけるものはソクラテスではなかつたと傳統的に考へられてゐたことに基くのであらう。自分の見ると、このによれば、プラトンのこれらの問題に對する關心は主としてソクラテスの死後數年、マクナ・カラエキアのピュタゴラス學徒との交際によるものであらう。ところが、これらの問題は、テイラーがその成立の時期を正當にも決定したやうに、ソクラテスの死後間もない頃に成れる「ゴルギアス」の中にも出てゐる。又、「辯明」に於ては、「靈魂の不滅」は單なる二つの中の一つではなくして、ソクラテスのとらうとする方のものであつた。且つ又、「辯明」は、プラトンが自ら聞いたソクラテスの唯一の演説であつたといつてゐる。「辯明」が歴史的に忠實なものであるか否かに就いては異論もある。が、何百人もの市民達が聞いた演説の主脈を甚だしく變へたことは信ぜられない。又、判決と死との間に、ソクラテスの考へは靈魂の運命の問題に向つたかも知れない。その限り「フアイドン」に於ける省察は歴史的であらう。併し私がイデア説に就いて陳べた見解が正しい限り、「フアイドン」に現れた靈魂不滅の入念な議論をソクラテス自身のもつと認めることは出来

ない。

パーネットやテイラーが主張したやうに、ソクラテスこそ、希臘思想に靈魂の觀念を、しかも我々の存在の完全な靈的部分として、導入した最初の人であつたらう。大體からいつて歴史的ソクラテスを傳へるものといつてよい「メモラビリア」やプラトンの初期の諸對話篇に於てさへ、靈魂の配慮と養育とは力説されてゐる。プラトンのやうに、ソクラテスによつて靈魂をかかも重んじることを教へられ、彼の晩年に於ける靈魂の將來に就いての省察を知る者が、師の省察を自分で進め、それをヒュタゴラス派の學說や彼自身のイデア說に結び付けて、精巧なものにまで仕上げた、と考へることも許されるであらう。若し「フアイドン」をこのやうに解するとき、この對話篇こそ、プラトン自らがその最もよき思想の靈感を負ふところの人と感じた彼の師への素晴らしい贈物と考へられるであらう。

以上、ソクラテス問題に就いて、パーネットやテイラーとの意見の相違を述べた。ソクラテスやプラトンの研究に新しい刺戟を與へ、幾多の貢獻をなしたこの二人の學者に禮を失はしはしなかつたかと惧れる。テイラーはその近著「ソクラテス」に於て感歎を禁じ得ない業蹟を示してゐる。如何なる程度にプラトンはソクラテスに負つてゐるか。その正確な規定に就いては意見の相違がある。だが次のことだけは眞理である。哲學をプラトンやアリストテレスの進んだ軌道に置いたのはソクラテスである。そしてこの兩人を通じて彼は、後代の哲學的思索に、又現代總ての教養ある

人士の思想に、最も力強い影響を與へてゐるのである。

(以上は英譯アリストテレス全集の編輯者として知られるロス教授が、英國古典學會總會——一九三三年四月六日ノティンガム大學——に於て試みた會長演說の要旨である。同會々報第三十卷七一—二四頁より服部英次郎抄譯)

補正 前號所載、エックハルト羅甸文著作集の發行所はライプチヒ、フエリクス・マイナー書店。

## 寄贈雜誌

七月號 哲學雜誌、文化、丁酉倫理講演集、宗教研究、基督教研究、理想(現代美の諸相)、生理學研究、唯物論研究、社會學徒、學校教育、信濃教育、奈良縣教育、教育日本、哲學改造、呂、大東、國維、願慧、湖畔の聲、美以部